

読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチ & デザインセンター
主任研究員 天野 敏昭

『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』

● 帚木 蓬生 著 朝日新聞出版 1,300円+税



「ネガティブ・ケイパビリティ（負の能力もしくは陰性能力）」は、著者によれば、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」です。この言葉は、英国の詩人ジョン・キーツ（1795-1821年）が、二人の弟に宛てた手紙の中で、「ネガティブ・ケイパビリティは、特に文学で偉業を成し得る形質で、シェイクスピアが大いに保有していた¹という件にみられ、その後、英国人の精神科医・精神分析医ウィルフレッド・R・ピオン（1897-1979年）の医学論文の中で、「相手を本当に思いやる共感に至る手立て」として、精神分析の重要な概念だと再発見・紹介されたことで著者の目にとまりました。

現代の社会で「ネガティブ」であることを肯定的に捉えることは難しくなっていますが、「ポジティブ」なだけであらゆる問題を解決できるわけではありません。著者は、精神科医になって5、6年目の頃に一進一退の症状の患者に接するようになって臨床精神医学の限界にも気づき始め、そうした時に「ネガティブ・ケイパビリティ」に出会い、今日まで支えられてきたと述懐しています。

どうにもできない状況に持ちこたえていくには、「日葉（何とかしているうちに何とかなる）」と「目葉（あなたの苦しい姿は、主治医であるこの私がこの目でしかと見えています）」の処方重要であることや、状況が好転する例として、「意味づけ（治療を受けていると感じること）」と「期待」があれば、「プラセボ（偽薬）効果」を生む可能性があることに言及しています。

新型コロナウイルス感染症の拡大は、自分や集団の思考や行動が他者に及ぼす影響を推量することを要請しますが、「ネガティブ・ケイパビリティ」は、今も終息が見通せない困難な状況において社会の様々な局面で応用可能な能力だと思われます。

本書の各章では、「ネガティブ・ケイパビリティ」が、医療、脳（希望）、創造行為、文学、

教育、寛容性などと関連付けて論じられます。その中で創造行為や教育との関係を論じた第7章と第9章は、産業振興や人材育成との親和性が感じられます。

創造行為との関係では、創造性の源になる認識形式の6次元（知性／知識／能力をどこに集中させるかという知的様式／性格／動機づけ／環境）の1つ、「性格」として指摘されるのが、「曖昧な状況に耐え」、「切れ切れのものが均衡をとり一体となるのを待ち受ける能力」であるという研究から、結論づけや成果を急がないよう戒めています。

また、教育との関係では、問題解決のための教育（ポジティブ・ケイパビリティの養成）が強調されるあまり、問題設定の問題そのものが平易化される傾向が生じる可能性があることを指摘し、「世の中には、そう簡単には解決できない問題が満ち満ちているという事実」を伝達し、答えの出ない問題を探し続ける挑戦こそが教育の神髄ではないかと主張しています。教育・研究に求められる「運・鈍（表面的な解決を図らない）・根（根気）」が、「ネガティブ・ケイパビリティ」の別な表現であるという主張も賛同し得る考え方です。

「ケイパビリティ」という言葉は、経済学者や哲学者などが提唱してきた「ケイパビリティ・アプローチ（潜在能力アプローチ）」にみられるように、生き方を選択する自由（幅）を広げることに焦点がおかれ、ややポジティブな議論に傾倒しがちです。既定のものの見方や思考から少し視点をずらし「不確実なものや未解決のものを受容する能力」こそが、物事の本質や他者の体験の核心に迫り、想像を通じて共感や寛容に至る道であることに改めて気付かされる良書だと思います。

【著者略歴】

作家、精神科医。東京大学文学部、九州大学医学部卒業。1979～80年マルセイユ・聖マルグリット病院神経精神科、1980～81年サンタンス病院精神科で研修。現在、福岡県中間市で通谷メンタルクリニックを開業。主な著書に、『閉鎖病棟』（山本周五郎賞受賞）、『逃亡』（柴田錬三郎賞受賞）、『やめられない ギャンブル地獄からの生還』、『蠅の帝国』『蜚の航跡』（2作品で日本医療小説大賞受賞）、『悲素』など

¹ Letter to George and Thomas Keats, December 28, 1817 (1817) by John Keats
https://en.wikisource.org/wiki/Letter_to_George_and_Thomas_Keats,_December_28,_1817